

「信じる勇氣」

先週の月曜日、岐阜県は関市にあります中部学院大学というところで、クリスマス礼拝の奉仕をしてきました。敦賀教会にも何度か来てくださった高木総平牧師が、宗教主事をされている大学で、そのつながりで、お声をかけて頂いた形になります。牧師、伝道師、あと、神学生をしていた頃を合わせると、こういう説教奉仕は 15 年ほど続けていますが、大学生に向けてお話をするのは、今回が初めてでした。実のところ、普通なら、大学院在学中なんかに、自分のところの大学の学生向け礼拝で、そういう経験を大抵の場合、するものなのですが、私の場合は、何故か機会がなく、避けられていたのか・・・、今まで過ごしてきました。そんな中、巡ってきたのが、今回のクリスマス礼拝奉仕でした。実は、敦賀教会幼稚園の先生の中に、この中部学院大学の卒業生がいて、事前に大学の様子や、クリスマス礼拝の様子を聞いていました。すると、「園長先生、最初に謝っておきますが、クリスマス礼拝では、誰も話聞いてないと思います」と言われました。まあ、私自身の大学生時代を思い返せば、別に不思議でもないことで、ここにお集りの皆さまのように自由意志で礼拝に出席するわけじゃなく、授業とか単位とかの関係で招集されるのですから、耳と心が他所に行ってしまうのは、仕方のないことです・・・でも、内心、この卒業生の先生の証言を聞いて、「めっちゃ、ザワついていたら、どうしよう」とか、人並みに不安にも思いました。そして、迎えた当日。白を基調とした明るい礼拝堂には、岐阜で一番立派と言われるパイプオルガンが備えてあり、広々とした空間に約 400 の席が設けてありました。聖歌隊とハンドベル部の奉仕もあり、聖書朗読は、留学生を交えて行われ、ドイツ語、中国語、ミャンマー語など複数の言葉で語られました。さすが設備と人材の揃っている大学ならではの礼拝順序であると思いました。聖書朗読

が終わり、いよいよメッセージの時がやってきました。やっぱり緊張しました。でも、卒業生の先生の証言とは全く異なり、学生さんたちは静かにメッセージを聴いてくれました。静かにしていただけで、聴いてくれているか、どうかは、本当のところは分かりませんが、少なくともザワついてどうしようもない、ということはありませんでした。最後に、祝祷をして、無事にお役を果たすことが出来ました。

無事に終わられたこと、それだけで有り難いことでしたが、礼拝後、嬉しいことが、もう一つありました。一人の男子学生が声を掛けてくれて、「ページェントについて知りたいです」と。メッセージの中で、敦賀教会幼稚園でのページェント、イエス様誕生の物語を伝える劇の様子を伝えただけですが、聴けば、この男子学生はクリスチャンで、キリスト教主義の幼稚園を卒園したのだけれど、その幼稚園ではページェントの取り組みはなかったんだそうです。そして、今は大学で幼児教育学科にいて、ページェントのことについて詳しく調べてみたいんだ、と。これは、牧師として、と言うより、幼児教育に関わる一人の園長として嬉しい申し出でした。ちょうど、今年の敦賀教会幼稚園のページェントも YouTube というインターネットのサービスを使って、ライブ配信をしていましたので、この男子学生にも YouTube でページェントを見られるようにして、「どうぞ、研究に使ってください」と伝えました。幼稚園でも、教会学校でも、ページェントをよく取り入れていますが、何故、ページェントと幼児教育が紐づいて来たかという歴史は、実のところ、よく分かっていません。もともと、ページェントは、「神秘劇」と呼ばれる聖書全体を網羅的に演劇化した超大作の、「クリスマスの部」に過ぎなかったのですが、他の部分が廃れていく中で、ページェントだけが現在に残されてきました。しかも、当初は大人の演じるものだったのが、子どもの劇になっていった事情なんかも、多分、説明はされていないんですよね。当然、ページェントの持つ教育上の意図や目的、キリスト教保育・教育における位置づけなんてものも未解明のままです。あまり大き

なことを、この男子学生に期待してしまうのは酷かも知れませんが、でも、この偶然の出会いをきっかけに、ページェントについて、私たちも知らない新事実が発見され、論文として発表される可能性もあるかと思うと、本当に良い機会を与えられたな、と思います。

クリスマスのメッセージを考える立場から致しますと、これは、もう手垢のついた話題となっていますが、私たちが今日の日まで過ごしてきた「アドベント」という言葉と、冒険を意味する「アドベンチャー」という言葉は、同じ語源を持つ関連語です。「アドベント」の間に、前人未到のジャングルを冒険することはないにしても、でも、何らかの冒険的なことに、私たちは出遭わされる、ということは言えるかも知れません。今回、私が、初めて大学生に向けてメッセージを語ったように、また、今日の聖書箇所にあるように、羊飼いが天使の大群に遭遇し、そして、ダビデの町、ベツレヘムまで出向いたように。初めての場所に、初めての経験に導かれていく。ちょっと不安だけど、でも、示された言葉を信じて、一步を踏み出して、まだ見ぬ光景を見に出かけていく。アドベントには、そういう意味が、もともと含まれているのだと思います。そして、導かれた先では、出かけていった先では、最初の不安を大きく超えて、なんだか良いことが起こるもんなんですね。それがクリスマスという出来事なのだと思います。

クリスマスは、多かれ少なかれ冒険を経た先に実現した恵みの出来事なのです。赤ちゃんイエス様の両親であるヨセフとマリアも、妊娠後期の無茶な旅を続けた先に、最初のクリスマスを迎えました。東方の占星術の学者たちも、自分たちの国を離れて、星の光を頼りに夜な夜な歩みを進めるという旅を続けてきました。そして、羊飼いが、多分、この羊飼いが一番冒険をしたと思います。今日の聖書箇所の証言が真実なら、彼らは、静かで真っ暗で寒々しい野原の真ん中で、いきなり輝く天使に遭遇するわけです。現在の私たちが同じ状況に置かれると、絶対に UFO だと思ってしまうでしょう。連れてかれるって思って絶対に怯えるに違いありません。たとえ「恐れるな」って言われ

でも、すぐに恐怖を拭うことはできないと思います。でも、羊飼いは、怯えつつも、しっかりと天使たちの伝える言葉に耳を傾け、その一言一句を心に留めていきました。そして、非常に勇気ある言葉を語ります。「さあ、ベツレヘムに行こう！」と。聖書には、主の御言葉を受けて、心を動かされた人たちが沢山出てきますが、この羊飼いはほど快活に、威勢よく応えた人って、多分いないと思います。「さあ、行こう！ その出来事を見ようではないか」。なんて勇気ある決断なんだろうかと思います。これこそ信仰深いってものなんでしょうね、きっと。御言葉に応える、御心に従う、ということ、この羊飼いは実践しています。

恐れ、不安、心配、疑い。知恵や知識があればこそ、頭と心に思い浮かぶ、私たちの行動を妨げる心理的要因は、沢山あります。まあ、それを「慎重さ」と呼ぶのですが、時には、そういう「慎重さ」を超えて、「さあ、行こう！」と心に決めた方が、良いこともあるんですよね。「初めてだから分からない」とか「経験がないから無理だと思う」とか「前例がないから難しい」とか、慎重になる理由には事欠きませんが、時には冒険する気持ちも大切です。今回の聖書箇所が登場する羊飼いにしても、天使たちの言葉を全部信じていたかどうかは分かりません。慎重な羊飼いは「いや、絶対怪しいし、ベツレヘム遠いし、やめようよ」と思ったかも知れない。でも、勇気を出して、信じて、向かった先で、世界で最初にクリスマスを迎えました。冒険したからこそ得られた恵みですね。神様の導かれる歴史には、そういうことがあります。

「クリスマスだから、冒険してみる」というストレートな受け止めでもいいですが、もうちょっと深読みするなら、「神様の御計画は、私たちにとって冒険に見えることがある」という捉え方を忘れないでいたいと思います。私たちの信じる神様は、救い主を飼い葉桶に寝かせる神様であり、その記念すべき最初のクリスマスに律法学者や祭司長や長老ではなく、羊飼いを招かれる神様であり、そもそも、言葉さえ喋れない赤ちゃんを救世主として、この世にお与えになる神様です。そこ

には、私たちの常識と発想を超えた、遠大な御計画があります。クリスマスは、その神様の大きく、深く、そして高い、神様の御心と愛とが十分に発揮された出来事です。クリスマスをお祝いする今日、私たちは、私たちの小さな想像力に決して収まらない神様の御計画に、期待と希望を置いて、信じて祈ることを忘れないでいたいと思います。

世界中で祝われ、祝われることはなくとも、意識され、多くの人を巻き込んで実現するクリスマスは、神様の愛と救いの予兆であり、今後、本当に実現するであろう、平和な世界の先触れであると私は信じています。暗く、悲しいニュースが消えない日々からこそ、寒い馬小屋に生まれた救い主イエス・キリストの御誕生を心に留めて、暗闇に光が差す、そのイメージを大切に持っていたいと思います。

どうか、私たちが様々な疑いや不安を乗り越え、一つの希望の光を信じて、永久の安らぎと平和を、自らの心にお迎えすることができますように。最後に、お祈りを致します。

神様。今日、私たちは、2000 と少しの数を重ねた、クリスマスをお祝いしています。私たちの信仰の先達は、「飼い葉桶に眠っている赤ちゃん」に希望と救いの光を見出しました。その常識を超えた光景に、あなたの御計画を認めて、嬉しくなり、そして賛美したのです。羊飼い達も、恐れと、怯えを乗り越えて、御子の下に駆け付けました。そこに、どれだけ篤い信仰があったことかと思えます。どうか、神様、2000 と少しの数を重ねた、クリスマスをお祝いする私たちにも、この先達に、勝るとも劣らない、大きな信仰と確信をお与えください。未だに戦争の報せが届き、社会の不安や不満が消えない、この世にあって、なお期待と希望を忘れずに、明日を生きていけるように、私たちに確かな光を示してください。いや、すでに示され、輝いている光にしっかりと目を向け、手を伸ばし、それをつかみ取るための勇気をお与えください。恐れる気持ちには励ましを、不安に対しては信頼を、疑いには確信をお与えください。私たちが、自らの人生を喜び、祝いながら、生きていきますように。御子の輝きに照らされ、支えられて、足取り確かに、歩いていきますように。どうか、御守り、お導きください。

このお祈りを、我らの救い主、御子イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。